

Title	内村鑑三の武士道
Author(s)	岩野, 祐介
Citation	アジア・キリスト教・多元性 (2010), 8: 31-43
Issue Date	2010-03
URL	<a href="https://doi.org/10.14989/108430">https://doi.org/10.14989/108430</a>
Right	
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	publisher

## 内村鑑三の武士道

岩野祐介

### 伝統思想としての武士道について

異文化、外来思想を受容する上で、受容する側にもともと伝わっていた文化・思想が土台となるということは考えられることである。例えば仏教が受け入れられていく上では、伝統的な自然と結びついた神観との関連づけが重要であったと考えられている。

キリスト教受容の上で、その土台となったのが「武士道」である、という考え方は以前から存在している。では何故「武士道」なのであろうか。ここには、二つの要素が混在していることが指摘できるであろう。ひとつは、事実として、武士階級の青年が指導者になったことである。内村、植村、海老名、みな武士階層出身の青年である。このことについて、大内三郎の指摘は興味深い。大内は、初期キリスト者においては、信仰の、「個人的・内面的問題と外的な歴史形成の倫理問題」とが「雑然として一つのものに捉えられていた」<sup>1</sup>ことを述べる。個人の問題がそのまま新日本形成の問題とされたのである。となれば、「国のために」働こうとしながら、その場を与えられることのなかった、旧佐幕系の没落武士階級の青年たちがそのような自覚を持ちやすかったということは、一定の説得力を持つことではないであろうか。

もう一つは、内村、植村、新渡戸などが理念としての武士道に言及したことである。とはいえ、例えば新渡戸が言う「武士道」は、さほど限定的な「武士道」ではない。その著作『武士道』において言及される精神性は、仏教（特に禅）や和歌、茶道などを含んでおり、極めて幅広いものである。<sup>2</sup>ここで思い出されるのが、英語圏でもっとも詳細な内村研究をしているとあってよいハウズの指摘である。彼は、「彼等（内村等初期キリスト教指導者を指す）がキリスト教を学んだのと同様な、日本の伝統思想に関する客観的・体系的な知の蓄積が存在しなかった」ことを指摘している。<sup>3</sup>彼らにとっても「武士道」とは、自明のものではなかったのである。

内村は、武士道を台木としキリスト教を接ぎ木する、という表現をした。戦時中、日本

---

1 海老澤有道・大内三郎『日本キリスト教史』（日本キリスト教団出版局、1970年）、261ページ。

2 新渡戸稲造『武士道』（矢内原忠雄訳、東京、岩波書店〈岩波文庫〉、1938年）を参照。

3 John F. Howes *Japan's Modern Prophet: Uchimura Kanzô, 1861-1930* (Vancouver, UBC Press, 2005), 389 p.

キリスト教団が戦争協力を正当化する文章「大東亜共栄圏に在る基督教徒に送る書翰」の中で引用した<sup>4</sup>のも内村のこの言葉であった。しかし、内村が用いる武士道という表現には、かなりの幅がある。内村の述べる「武士道」の中には、自立した一人の人間といったニュアンスもある一方で、主君のために自己を抑制し服従する、といった要素もまた含まれているのである。

内村等は事実として武士階級出身なのであるから、彼らが「自分たちは武士である、武士的である」ということに間違いはない。しかし、武士道的であることと、武士そのものであることとは違う。同様に、武士道的な要素を持つキリスト教を、各個人に伝道することは、各個人に武士的になれ、ということとは異なる。例えば内村は晩年、塚本虎二のことを町人的として批判している。<sup>5</sup>しかし、それを所属階級から生ずるどうしようもない違いである、と捉えてしまつては、武士でない者に武士道がわからないのは当然であるということになり、そもそも塚本を批判する意味が無くなってしまう。塚本に対する「町人根性」といった物言いは、あくまでも町人一般を階層として批判するといったものではなく、個別の事例と関係の中でのことであるということは確認せねばならないだろう。各人の独立を重視する考え方をもつ内村は、自分らしい＝武士的と考え、塚本らに教派教会化

---

4 「日本基督教団より大東亜共栄圏に在る基督教徒に送る書翰」では次のように内村を引用している。

「我国の有力な基督者の一人である内村鑑三は、当時欧米文明の滔々たる輸入と憧憬との支配してゐた時代風潮の中にあつて「世界は畢竟基督教によりて救はるるのである。而かも武士道の上に接木せられたる基督教に由りて救はれるのである」と喝破した。…

彼の予言はまた諸君にも当嵌るところであり、心ある士が既に考へられてゐるやうに、大東亜には大東亜の伝統と歴史と民族性とに即した「大東亜の基督教」が樹立さるべきである。」（日本基督教団教団宣教研究所資料編纂室編『日本基督教団史資料集 第2篇 戦時下の日本基督教団（1941年～1945年）』、東京、日本基督教団出版局、1998年、322ページ）  
ここでは、武士道は「我が国体の尊厳無比なる基礎に立ち、天業翼賛の皇道倫理を身に体したる日本人基督者」の土台となるものと理解されている。これは内村の武士道理解とは異なり、キリスト教を日本化（しかもその日本とは、海外に軍事侵略を行う大日本帝国のことである）させようとするものとなっている。しかし逆に考えれば、内村の言う「武士道的キリスト教」には、このような形での「曲解」が可能な曖昧さがあつたということでもあることになる。

5 政池仁『内村鑑三伝 再増補改訂新版』（教文館、1977年）、620-1ページには、内村が「ぼくの信仰は武士の宗教だが、塚本のは町人の宗教だ」と言った、と記されている。政池はこう続けている。「私はこれを聞いて「町人の宗教」とはどういう意味かと思った。…しかし内村の亡くなったあくる年の昭和六年に満州事変が起り、それがエスカレートしてついに日中戦争、さらに日米戦争になった。その時に塚本のとつた態度で私は初めて「町人の宗教」と内村が言った意味がわかつた。」（621ページ）塚本は、十五年戦争期、結果として戦争に協力したととられても仕方ない態度をとっていたのである。

するような性質があったため、それを数の力を重視する＝町人的、と表現しているのである。もちろん、そういう物言いが正当であるというのではまったくくない。

### 内村における武士道

内村がどの程度「リアルに」武士ということを感じていたか、については以前から疑問が提示されている。太田雄三は、少年時代切腹寸前にまで追い込まれた海老名弾正の事例と対照し、内村の「サムライの子としての実際の体験はかえってずっと希薄だったのではないか」と述べ、彼の武士と武士道に関する言及は「空虚な理想化されたもの」であると述べる。<sup>6</sup> 太田によれば、内村が「最も日本人らしい日本人のように見えたのは、反対に彼の日本の伝統からの疎外の現われ」なのである。

ただしここでは、太田の見解に関する是非は置いておいて（個人的には大いに説得力を感じるものであるが）、内村鑑三は、どのように武士や武士道に言及しているか、ということを確認していきたい。「空虚な」ものかどうかはさておいて、その「理想」の内容を確かめていくことにより、いかにしてそれがキリスト教の台木足り得ると内村が考えていたか、を明らかにしたいのである。そうすればそれが、自動的・必然的に排外的ナショナリズムと結合するようなものであるかどうか、も明らかになるであろう。

### 台木としての武士道

具体的に内村が武士道をキリスト教の台木と述べたのは以下の文章においてである。

「武士道は日本国最善の産物である、然し乍ら武士道其物に日本国を救ふの能力は無い、武士道の台木に基督教を接いだ物、其物は世界最善の産物であつて、之に日本国のみならず全世界を救ふの能力がある、今や基督教は歐洲に於て亡びつゝある、而して物質主義に囚はれたる米國に之を復活するの能力が無い、茲に於てか神は日本國に其最善を獻じて彼の聖業を扶くべく要求め給ひつゝある、日本國の歴史に深い世界的の意義があつた、神は二千年の長きに涉り世界目下の状態に應ぜんがために日本國に於て武士道を完成し給ひつゝあつたのである、世界は畢竟基督教に由て救はるゝのである、然かも武士道の上に接木されたる基督教に由て救はるゝのである。」<sup>7</sup>

6 太田雄三『内村鑑三 その世界主義と日本主義をめぐって』（研究社、1977年）、22-23ページ。

7 内村「武士道と基督教」、1916年、『内村鑑三全集 22』、161-2ページ。（『内村鑑三全集』、岩波書店刊、1980-84年。以下『全集』と表記する。なお、引用文に付されたルビのうち、通常のルビは「聖書之研究」等の原典から付されているものであり、〔 〕に入ったルビは全集編集者により付されたものである。）

詳しいことは後述するが、内村の武士・武士道に関する言説の特徴の多くが、この文章には端的にあらわれている。それは物質主義や西欧・欧米に対する批判と結びついていることである。ここで注意せねばならないのは、1916年、即ち第一次世界大戦中の文章だということである。つまり、特定の歴史的状況の中で武士道について発言しているのである。キリスト教世界である西欧の国々が当時としては未曾有の大戦争である第一次世界大戦へと突入し、物質主義的なアメリカ合衆国はそれを止めようとはしなかった。そのような状況の中で、救済史としての世界史の中での、日本の役割・あり方について内村が考えていたということは重要であろう。

### 内村における武士道の諸相

以下では、教文館版信仰著作集に付属した、武藤陽一作成の索引に基づき、武士・武士道について言及した箇所にあたり、分類した結果を示している（ただし書簡・日記類での引用は除いた）。すると、主として「何々のでなく武士的」、というパターンで武士・武士道を語っている、ということが確認できるのである。

#### A 様々な現実に対する理想主義的価値観としての武士道

世俗的な欲望、あるいは現実主義的価値観に対して、武士・武士道が理想主義であることを評価したものをここに分類した。特に、無欲さ（物質やお金よりも、名誉を重んずることを含む）、あるいは自制ということ等が強調される。<sup>8</sup>

##### 1903 来世は有耶無耶

「斯かる無私無慾の日本武士の雪の如き潔き心」<sup>9</sup>

##### 1920 武士の模範としての使徒パウロ

「猶太人にしてイエスキリストの弟子なりしパウロは真正の武士にして武士道の精神を体現したる者であつた、… 彼は乞求依頼の恥辱を忍ばんよりは寧ろ死ん事を欲した、… 彼の見る処に由れば今日所謂商業政策即ち商売根性は諸悪の原因であつて、個人を毒し社会を腐らし国家を亡す者であると、更に又パウロ程其主に対して忠なる人はなかつた、… パウロは独立であつた、金銭を賤んだ、主に対して忠であつた、斯くて彼は古の武士の

8 他では、以下の文章における武士・武士道に関する言及をここに分類した。

1897年「胆汁数滴 代価付の道德」、1898年「飢渴の恐怖」、1903年「家庭の建設 高尚なる目的」、1925年「結婚式の辞」

9 内村「来世は有耶無耶」1903年、『全集 11』448ページ。

模範であつた、…」<sup>10</sup>

## B 西欧的価値観に対する武士道

Aに近いが、中でも特に、西欧的な物質主義・金銭主義に対する精神性としての武士道を高く評価するものをここに分類した。<sup>11</sup>

### 1906 伝道師の処世問題

「…不幸にして物質的なる米国人より始めて基督教を聞いた我等は今や其束縛(きはん)の羈絆より脱せんと欲して脱し得ません、然かしながら我等はすべての力を尽して一日も早く此有害の感化より脱却しなければなりません、パン問題の如きに就ては旧来の我国の武士道の方が遥かに米国宣教師に由て伝へられし基督教(キ)に勝さつて居ります。」<sup>12</sup>

### 1913 米国人の金

「…苟(いやしく)も宗教道德の教師たる者が余輩を説服せんとするに方(あたつ)て此世の利害問題を以て余輩に迫るが如きは、日本武士の家に生れし余輩には、如何(どう)しても解(わか)らない、…」<sup>13</sup>

## C 近代主義に対する武士道

近代的な個人主義＝利己主義であるとして、それに対する、「他のために仕える」ものとしての武士道を主張する文章をここに分類した。

### 1925 近代人の愛と基督信者の愛

「…昔の日本武士の家庭は近代人のそれよりも遥に健全であり、幸福であつた。…愛する者の為(ため)に自己を棄つ。神の為(ため)、国の為(ため)、義務の為(ため)に愛其物をすら犠牲に供する事、それが本当の愛である。」<sup>14</sup>

### 1926 基督信者の結婚

---

10 内村「武士の模範としての使徒パウロ」1920年、『全集25』362-3ページ。

11 他では、以下の文章における武士・武士道に関する言及を、ここに分類した。

1908年「武士道と宣教師」、1919年「清秋雑感」、1922年「ロマ書講演約説 第51講」、1924年「米国人の排斥を歓迎す」、「日米対話」、1929年「ヘブライ人と日本人」

12 内村「伝道師の処世問題」、1906年、『全集14』308ページ。

13 内村「米国人の金」、1913年、『全集20』44ページ。

14 内村「近代人の愛と基督信者の愛」、1925年、『全集29』224ページ。なお引用部中●による傍点部は、原文では○による傍点が付されている。

「古<sup>〔いにしへ〕</sup>への日本武士は君の為に結婚しました。クリスチャンは神の代表者なる主キリストの為に結婚します。自分の為ではありません、勿論自分の幸福の為ではありません。主人の為にあります。結婚の根本義に於て武士道と基督教は全然一致します。」<sup>15</sup>

#### D 愛至上主義に対する武士道

愛に対する義、軟弱に対する武士的剛直という面を強調する文章をここに分類した。なお、1927の「弟子を持つ不幸」では、無分別な愛を「町人」的であるとしている。<sup>16</sup>

##### 1907 基督教道德の欠点

「初代の基督信者より其猶太教を除き、英民族より其ピコリタン主義を除き、日本人より其武士道を除きて、基督教道德の害は懼<sup>〔おそ〕</sup>るべきものである、… 無分別なる慈善の中にも愛の福音の無分別なる伝播ほど懼ろしい者はない、…」<sup>17</sup>

##### 1927 弟子を持つ不幸

「○余は又基督者<sup>クリスチャン</sup>であると同時に日本人である。而かも旧式の日本人である。小身者なりと雖も武士の家に生れ、日本武士の名を汚<sup>けが</sup>らんと今も猶ほ努むる者である。若し基督教が日本武士の理想を実現する者であるとの事が解<sup>わか</sup>らなかつたならば余は決して基督者<sup>クリスチャン</sup>に成らなかつたであらう。… 是れ聖化されたる武士道であつて、余は此道に歩まんとして努むる者である。故に基督者である<sup>クリスチャン</sup>と雖も、英米流の基督者たる事は出来ないのである。余は神は愛なりと云ひて如何なる罪惡をも無条件にて赦<sup>ゆる</sup>せと云ふ所謂町人道德を採用する事は出来ないのである。」<sup>18</sup>

#### E 1 日本の世俗的道德としての武士道

理想的な日本的世俗道德として、武士道を提示する文章をここに分類した。なおこの視

---

15 内村「基督信者の結婚」、1926年、『全集 30』48ページ。なお引用部中●による傍点部は、原文では○による傍点が付されている。

16 他では、以下の文章における武士・武士道に関する言及を、ここに分類した。

1913年「余の愛するパウロ」

17 内村「基督教道德の欠点」、1907年、『全集 15』304ページ。

18 内村「弟子を持つ不幸」、1927年、『全集 30』393-4ページ。本文の冒頭には「原稿箱の底より左の古い原稿が現はれた。棄つるに忍びず、茲に之を載する事にした。」とある。なお引用部中●による傍点部は、原文では△による傍点が付されている。

点からは、当然のことながら、階級としての武士出身かどうかには拘らないことになる。<sup>19</sup>

### 1903 キリストと武士

「人類の理想はキリストである、日本人の理想は武士である、而して武士が其魂（しか）を失はずして直にキリストを信ぜし者が余輩の理想である、…」<sup>20</sup>

### 1925 十字架の道 山羊と羊の比喻

「神が好み給ふものにして憐憫の如きはない。彼はまことに慈悲の神である。其反対に彼が憎み給ふものにして無慈悲の心の如きはない。其点に於てエホバの心と武士の心（よ）と克（よ）く肖てゐる。弱者を見て之を憐まず、反（かえつ）て之を苦しむるを以て喜びとなすが如きは、武士の堪ゆる能（あた）はざる所であるが如くに、又神の赦（ゆる）し給はざる所である。」<sup>21</sup>

また、とりわけ特徴的なものとして、以下のものは別扱いとした。

- ・覚悟をもった人間としての武士（覚悟の足りない現代人に対して）

### 1910 「餓死の決心」

「昔時の武士に切腹の覚悟ありたり、今の基督者に餓死の決心なかるべからず、…」<sup>22</sup>

- ・独立した人間としての武士（集団や他人に依存した人間に対して）

### 1900 十五銭では高いといふの説

「…然し日本人であつて武士であつて、基督信者であるから依頼は嫌ひで独立は大好きである、…」<sup>23</sup>

- ・貴族に対する、武士

特権階級的な貴族性を批判するものであり、内村によれば武士はそうではない、ということになる。

---

19 他では、以下の文章における武士・武士道に関する言及を、ここに分類した。

1895年「余は如何にして基督信徒となりし乎」、1897年「後世への最大遺物 第二回」、1905年「寛容の精神」、1907年「緑陰独語」、1914年「武士道と仏教」、1916年「キリスト信者の行為」、1922年「ガリラヤの道 先駆者ヨハネ」、1928年「積極的無教会主義」

20 内村「キリストと武士」、1903年、『全集11』241ページ。

21 内村「十字架の道 山羊と羊の比喻」、1925年、『全集29』164ページ。

22 内村「餓死の決心」、1910年、『全集17』200ページ。

23 内村「十五銭では高いといふの説」、1900年、『全集8』508ページ。



1902 山桜かな

「此<sup>この</sup>武士<sup>ぶし</sup>と此<sup>この</sup>日本<sup>やまと</sup>心<sup>こころ</sup>ありて東<sup>とう</sup>国<sup>こく</sup>に仁<sup>じん</sup>慈<sup>じ</sup>の武<sup>ぶ</sup>威<sup>い</sup>は施<sup>せ</sup>かれ、幕<sup>ぼく</sup>政<sup>せい</sup>是<sup>これ</sup>が為<sup>ため</sup>に開<sup>ひら</sup>かれて、日本<sup>にほん</sup>人<sup>じん</sup>は七<sup>なな</sup>百年<sup>ひゃくねん</sup>の間<sup>ま</sup>公<sup>こう</sup>卿<sup>けい</sup>族<sup>ぞく</sup>の悪<sup>あく</sup>政<sup>せい</sup>より免<sup>まぬ</sup>るゝを得<sup>え</sup>たり ...」

・改革精神をもつ人間としての武士（現状を安易に容認する人間に対して）

1929 武士道と基督教

「... 其<sup>その</sup>（引用者注：武士を歌った琵琶歌の）殺<sup>せ</sup>伐<sup>ばつ</sup>の詞<sup>ことば</sup>は好<sup>この</sup>まないが、其<sup>その</sup>日本<sup>にほん</sup>武士<sup>ぶし</sup>の清<sup>せい</sup>風<sup>ふう</sup>霽<sup>せい</sup>月<sup>げつ</sup>の心<sup>こころ</sup>を歌<sup>うた</sup>うたる所<sup>ところ</sup>は今日<sup>けふ</sup>も猶<sup>なほ</sup>強<sup>こゝろ</sup>く私<sup>わたし</sup>の心<sup>こころ</sup>を牽<sup>ひ</sup>く、... そして日本<sup>にほん</sup>に於<sup>お</sup>けるすべ<sup>すべ</sup>の善<sup>よ</sup>き事<sup>こと</sup>は此<sup>この</sup>武士<sup>ぶし</sup>の道<sup>みち</sup>に由<sup>よ</sup>つて成<sup>な</sup>つたのである。慶<sup>けい</sup>応<sup>おう</sup>明<sup>めい</sup>治<sup>ち</sup>の維<sup>い</sup>新<sup>しん</sup>も、其<sup>その</sup>前<sup>まへ</sup>の凡<sup>たゞ</sup>ての改<sup>か</sup>革<sup>くわく</sup>も此<sup>この</sup>精<sup>せい</sup>神<sup>しん</sup>の結<sup>けつ</sup>果<sup>くわ</sup>である。... 我<sup>われ</sup>国<sup>こく</sup>に於<sup>お</sup>て思<sup>おも</sup>ひしよりも早<sup>はや</sup>くキリス<sup>キリス</sup>トの福<sup>ふく</sup>音<sup>おん</sup>が根<sup>ね</sup>を据<sup>よ</sup>えし理<sup>り</sup>由<sup>ゆ</sup>は、武<sup>ぶ</sup>士<sup>し</sup>が伝<sup>でん</sup>道<sup>だう</sup>の任<sup>にん</sup>に当<sup>あ</sup>つたからである。所<sup>い</sup>謂<sup>わ</sup>熊<sup>くま</sup>本<sup>もと</sup>バ<sup>ン</sup>ド、横<sup>よこ</sup>浜<sup>はま</sup>バ<sup>ン</sup>ド、札<sup>さつ</sup>幌<sup>ほ</sup>バ<sup>ン</sup>ド、之<sup>これ</sup>に加<sup>くわ</sup>はりし者<sup>もの</sup>の多<sup>おほ</sup>数<sup>すう</sup>は武<sup>ぶ</sup>士<sup>し</sup>の子<sup>こ</sup>弟<sup>てい</sup>であつた。彼<sup>かれ</sup>等<sup>ら</sup>は孰<sup>い</sup>れも武<sup>ぶ</sup>士<sup>し</sup>の魂<sup>たま</sup>をキリス<sup>キリス</sup>トに献<sup>けん</sup>げて日<sup>にっ</sup>本<sup>ぽん</sup>の教<sup>きやう</sup>化<sup>くわ</sup>を誓<sup>ちか</sup>つたのである。」<sup>24</sup>

E 2 キリスト教に対する世俗の価値観としての武士道

E 1 に近いが、ここではあくまでも武士道が「人間同士の価値観」にすぎないものであることが示され、信仰の立場による武士道の対象化がなされる。<sup>25</sup>

1911 人格の否認

「... 人<sup>ひと</sup>格<sup>かく</sup>に由<sup>よ</sup>るにあらざれば人<sup>ひと</sup>を救<sup>すく</sup>ふ能<sup>あた</sup>はずと云<sup>い</sup>ふ、若<sup>も</sup>し果<sup>も</sup>して爾<sup>その</sup>うであるならば人<sup>ひと</sup>を救<sup>すく</sup>ふ者<sup>もの</sup>は人<sup>ひと</sup>であつて神<sup>かみ</sup>でない、而<sup>しか</sup>して若<sup>も</sup>し爾<sup>その</sup>うであるならば基<sup>き</sup>督<sup>とく</sup>教<sup>きやう</sup>は儒<sup>にう</sup>教<sup>きやう</sup>、ス<sup>す</sup>ト<sup>と</sup>ア<sup>あ</sup>教<sup>きやう</sup>、武<sup>ぶ</sup>士<sup>し</sup>道<sup>だう</sup>と何<sup>なに</sup>の異<sup>い</sup>なる所<sup>ところ</sup>はない。」<sup>26</sup>

E 3 特に批判的に見たケース

E 2 のような場合より、さらにはっきり武士道を批判的に描くもの。<sup>27</sup>

1912 ヤソの流行

「... 戦<sup>せん</sup>争<sup>じやう</sup>には勝<sup>かち</sup>ち、生<sup>せい</sup>産<sup>さん</sup>力<sup>りき</sup>は増<sup>ま</sup>し、世<sup>せ</sup>界<sup>かい</sup>の第<sup>だい</sup>一<sup>いつ</sup>等<sup>とう</sup>国<sup>こく</sup>の中<sup>なか</sup>に算<sup>かぞ</sup>へらるゝに至<sup>いた</sup>り、日本<sup>にほん</sup>に未<sup>いま</sup>だ一<sup>いっ</sup>つ大<sup>だい</sup>切<sup>せつ</sup>なる者<sup>もの</sup>の欠<sup>か</sup>けて居<sup>ゐ</sup>ることを日本<sup>にほん</sup>人<sup>じん</sup>は感<sup>かん</sup>ぜざるを得<sup>え</sup>ざるに至<sup>いた</sup>つた、曰<sup>いわ</sup>く信<sup>しん</sup>仰<sup>やう</sup>、

24 内村「武士道と基督教」、1929年、『全集 32』164 ページ。

25 他では、以下の文章における武士・武士道に関する言及を、ここに分類した。

1907年「基督教の研究」、1912年「変わらざるキリスト」、1923年「武士道と基督教」

26 内村「人格の否認」、1911年、『全集 18』72 ページ。

27 他では、以下の文章における武士・武士道に関する言及を、ここに分類した。

1898年「西班牙の文士セルバンテス」

曰く安心、… 武士道は？軍人には善し、然れども農工商の平民には適せず、…」<sup>28</sup>

以上より、内村による武士道観を次のようにまとめることができるであろう。

- 1 内村の武士道は、理想主義的世俗道德のことである
- 2 内村の武士道には、対外的面が強い
- 3 内村の武士道には、対近代主義という面がある

そしてこのうち2と3が合わさって、西欧主義＝物質主義＝金銭主義・利益主義＝町人主義という図式が登場することになると考えられる。

### 「武士道と基督教」

それでは、新約に対する旧約に相当する精神性、キリスト教を受容する土台として武士道が挙げられる場合、その内実は何であろうか。武士道のどこが、キリスト教の台木としてふさわしいと内村は考えるのであろうか。以下ではその内容を、「武士道と基督教」というタイトルを与えられた文章2編から確認していきたい。まず1918年の「武士道と基督教」から検討してみよう。

#### 1918 武士道と基督教

「我等は人生の大抵(たいてい)の問題は武士道を以て解決する、正直なる事、高潔なる事、寛大なる事、約束を守る事、借金せざる事、逃げる敵を逐はざる事、人の窮境に陥るを見て喜ばざる事、是等(これら)の事に就て基督教を煩はすの必要はない、我等は祖先伝来の武士道に依り是等の問題を解決して誤らないのである、然れども神の義に就き、未来の審判に就き、而して之に対する道に就き武士道は教ふる所が無い、… 基督信者たる事は日本武士以下の物たる事ではない、…」<sup>29</sup>

「模範(ユダヤ)的猶太人たりしヨハネやパウロが模範的基督者たるを得たのである、武士道(すて)を棄、又は之を軽(かろん)ずる者が基督の善き弟子でありやう筈(はず)が無い、神が日本人より特別に要求(もと)め給ふ者は武士の靈魂(たましい)にキリストを宿らせまつりし者である。」<sup>30</sup>

先に各文章を分類した際にも「武士の模範としての使徒パウロ」のタイトルが見られたように、聖書に登場する人物の中で、特に内村により武士に擬せられるのは、パウロである。パウロはもちろん普通の意味での「武士」ではない。彼はローマの市民権こそ持って

---

28 内村「ヤソの流行」、1912年、『全集19』256ページ。

29 内村「武士道と基督教」、1918年、『全集24』8ページ。

30 同前。

はいるものの、いわゆる武人、軍人ではない。テント職人である。そのようなパウロ、そしてヨハネが例として挙げられることから、内村の考える武士道が階層的なものではないこと、また戦闘職種と関わらねばならないわけではないことが明らかである。

では内村の考える武士道の内容はいかなるものであるだろうか。ここではその特徴として、正直、高潔、寛大、約束を守ること、借金しないこと、逃げる敵を追わないこと、人が窮地に陥っているのを見て喜ばないこと、等が挙げられている。これらは、いずれもパウロが書簡においてキリスト者たちに訴えかけているのと同様な徳目であると言える。ゆえに、特に武士道に固有の徳目、というものではないように思われる。

続いては1928年の「武士道と基督教」<sup>31</sup>を見てみよう。

「○基督教は神の道であります、武士道は人の道であります。神の道は完全であつて、人の道は不完全であるは云ふまでもありません。…武士道は日本人の道であります。之を日本道徳と称して間違いないと思ひます。そして私供日本人に取りては実に尊い道でありまして、私供が神の道を知るまでは、実に世界無二の道でありました。…曾つて或る米国宣教師が武士道は切腹と敵打を教ゆる道であると云ひて、私の行為を詰つた事がありますやうに、基督教は武士道の敵である乎のやうに思ふてゐる基督信者が慚くないのであります。

○然し乍ら私はさうは思ひません。私は武士道は神が日本人に賜ひし貴き光であると信じます。…」<sup>32</sup>

そして内村がまず挙げる、キリスト教と武士道の共通点は、正直である。

「○武士道は正直を重んじます。真の日本人の嫌ふものにして詐欺陰険の如きはありません。…聖書は何んで有つても、何んで無くつても、誠実の書であります。…」<sup>33</sup>

続いて内村は勇気を挙げる。

「○武士道と云へば直に勇気を思はせられます。…日本人は義の為には死を恐れません。日本人が賤しむものにして卑怯の如きはありません。…イエスは阿弥陀様とは異ひます。彼に所謂「小羊の憤怒」がありました。彼は義の為に神殿を潔むるに方て

31 なおこの文章の冒頭で、参照すべき聖句としてピリピ 4:8 が挙げられている。

32 内村「武士道と基督教」、1928年、『全集 31』292 ページ。

33 同前、293 ページ。なおこの箇所では第2コリント 4:2 を引用している。またこの引用部中●による傍点部は、原文では○による傍点が付されている。

人の面を懼れませんでした。

… 其他福音書に現はれたるイエスの行為を調べて見まして、彼が死を懼れ、人を畏れた場合に一も見当たりません。只人が彼の勇氣に氣附かざる理由は、彼が愛の人であつて、自から劍を取つて人に向ひ、敵を斃して自己を救ひし例が一も無いからであります。」<sup>34</sup>

「… 聖書が示す所の神の人は凡て此種の勇者であつたのであります。… 只一人真理と正義の為に大敵を前にして身を其憤恚に曝らした者でありました。武士道と基督教とを較べて、勇氣が有つたとか無かつたとの相違ではありません。基督教の供する勇氣が武士道の供する勇氣に遙かに優つてゐたのであります。… 日本人に正義と真理との為には生命を惜まざるの精神があります。此精神を以つて基督教に接して、我等は其犠牲の精神に共鳴せざるを得ないのであります。…」<sup>35</sup>

「○武士は恥を重んじます。… パウロも亦、恥よりも死を択びました。」<sup>36</sup>

「○武士は遁げる敵を逐ひません、敵の弱きに乗じて之を攻めません。… 武士道はキリストの福音の如く敵を愛するまでには至りませんが、敵を敬ひ、其正当の立場を重んじます。…」<sup>37</sup>

ここで内村が挙げた、正直、勇氣、恥、敵に対する敬い（1918年の「武士道と基督教」で挙げられている寛大に対応すると考えることができるであろうか）、といった徳目の中では、敵に対する敬いということが、戦闘職種としての武士を若干意識させるものであるだろう。しかし、ここで内村が敵を敬うことの結果として挙げる言葉は、「基督教教界に於て往々に見るが如き論争確執は到底之を為し得ません」<sup>38</sup> というものである。よって内村はここで、外的な敵に対する、ということではなく、基督教界の中の問題を想定しているのである。外敵と戦うということではないのであるから、特に武士、戦闘性、ということ意識しているものではないと考えてよいであろう。

なおこの1928年の「武士道と基督教」の末尾で、内村は「或る信者」から相談を受け

34 同前、294 ページ。なおこの個所ではヨハネ伝 2:13-16 を引用している。また引用部中の傍点部「○武士道と云へば直に勇氣を思はせられます。」について、原文では○による傍点部が、同じく…イエスは阿弥陀様とは異ひます。について原文では△による傍点部がそれぞれ付されている。

35 同前、295 ページ。なお引用部中●による傍点部は、原文では○による傍点部が付されている。

36 同前、296 ページ。なお引用部中●による傍点部は、原文では○による傍点部が付されている。

37 同前、296-7 ページ。なお引用部中●による傍点部は、原文では○による傍点部が付されている。

38 同前。

た際、「日本人の武士道に由つてお決めなさい」とだけ答えたとの記述がある。<sup>39</sup> 太田雄三はこれを指して、これでは何を言っているのかわからない、内村の武士道理解に具体性がない証拠である、と評する。<sup>40</sup> なるほどその答えだけを抜き出せば、確かに何を言っているかわからない。しかしそれまでの文章と併せて考えると、内村の言う「武士道によって決める」とは、正直に対応せよといった類の内容であるということが想定可能ではないであろうか。

以上より、内村の考える、台木としての武士道が、人間関係を良好に保つ上での一般的な道徳性以上の特別なものとは言えないことが、明らかになったといえるであろう。確かに内村は「武士道」ということに関しては、はっきりとしたものを持っていなかったのかもしれないが、常識的な範囲においての道徳性を重んじていた、ということで問題ないのではないだろうか。少なくとも、日本的固有性ということ、改めてそこから取り出すことは困難であるように思われる。

#### まとめに代えて——武士と平民

内村が「武士道に接木されたキリスト教」という表現をしているのは確かであるが、しかしまた一方で「平民」という言い方を多くしていることも、見逃してはいけない。内村の平民観においては、労働、自然、平和がその特徴とされる。具体的には、農業従事者ということになるであろう。<sup>41</sup> 彼は、キリスト教は平民的宗教であるとも述べている。すなわち、貴族的・階級的でない、ということであり、神殿批判・司祭批判という要素がユダヤ・キリスト教に含まれることを考えれば、それは間違っていないであろう。

内村が「武士的」ということを重視したのは間違いのないことである。しかしその武士的であるということの内容が、他の伝統文化と共通するような徳目・道徳性を含むこと、さらに武士というものを独立した人間であり、貴族とは違うとの見解が含まれていることを押さえた上で、その「武士道」ということを評価するべきではないか。さらに、その「武士道」が特別な「日本らしさ」、「日本の固有性」といったことにこだわったものではない、ということは、もっと積極的に考えてもいいのではないであろうか。

ここまで見てきたような「武士道」的キリスト教の追求により、キリスト教理解が表層的あるいは文化的なものにとどまらず、求道者的、倫理的、内面的、個人的なものとなったということは言えるのではないであろうか。そしてそれにより、欧化ブームの一環として

39 同前、297 ページ。

40 太田、前出書、20-21 ページ。

41 三浦永光、「内村鑑三の「平民」の論理とその社会的基盤」、『内村鑑三研究6』（キリスト教図書出版社、1976年）、11-14 ページ。

キリスト教が終わってしまうことがなく、一定の層に対して、ではあるが、定着していったのである。

しかし同時に、「武士道」的なものを取り入れてしまったために、キリスト教のもつ倫理的に厳しい面がクローズアップされたことも確かである。それは、あるいはキリスト教の民衆化を妨げることに繋がったかもしれない。幕末から明治期にかけて様々な新宗教運動がおこるわけであるが、黒住教でも天理教でもあるいは金光教でも、その中で示される神像は非常におおらかで優しいイメージを伴うものである。そしてそれら新宗教運動がしばしば民衆の心をつかむことに成功していったことと比較すると、内村による武士道観は確かに一面では階級制度と距離をおくものであったにも関わらず、やはり民衆の運動といったものとはいささか離れたものであったということになるようにも思われるが、この問題は今後の課題とすることにした。

(なお本稿は、2009年12月京都大学大学院文学研究科に提出された学位申請論文『無教会としての教会—内村鑑三における個人の信仰と社会性との連関について—』の「4-3-2 内村鑑三における武士道」に一部加筆修正したものであることを付記致したい。)

(いわの・ゆうすけ 関西学院大学神学部助教)

